

平成23年6月5日
於アステールプラザ
松井輝昭

はじめに

(1)日本の名園に数えられる「縮景園」

- ・上田宗箇は1620年代に「泉水館」と称する、芝生を多用した藩主の庭園を作る
 - ・上田宗箇作庭の藩主の庭園は、1713年頃から「縮景園」と呼ばれるようになった
 - ・「縮景園」が名園に数えられるのは、園池を二分する「跨虹橋」があるためとも
- 白い石橋である「跨虹橋」が「縮景園」に出現したのは、七代藩主重晟による「お泉水」大改修のさなかであった。この石橋の強烈な印象により今日も名園に数えられる。

(2)私たちが迎えてくれる「縮景園」

- ・原爆で「縮景園」も大きな被害を受けたが、「跨虹橋」のみほとんど無傷で残った
 - ・「縮景園」は壊滅的な被害を受けたが、戦後まもなく復旧工事がスタートした
 - ・「縮景園」の復旧工事は40年余り続き、平成6年に土木工事事務所が撤去された
- 私たちがいまも「縮景園」を訪れ、心とむひとときをおくれるのは、40年余も続いた復旧工事のたまものといえる。しかし、ようやく復旧がなった「縮景園」も、1975年頃から周辺に高層ビルが建ち、新たな障害要因を抱えることになった。

(3)「縮景園」を訪ねる人とその減少化傾向 <参4>

- ・私は「縮景園」を訪ねるたびに、何ともいえない懐かしさ、清清しさを感じる
 - ・残念ながら「縮景園」を訪ねる人の数は、近年は減少化傾向が続いているようだ
 - ・現代は様々な楽しみが生まれており、「縮景園」に魅力を感じなくなっているかも
- 規模が小さい「縮景園」は全体が見渡せ、目の前に大きな池と池に浮かぶ島々、さらに木々の緑が広がっている。訪れた人々はなんともいえず懐かしい気持ちになりえる。
- ⇒「縮景園」は被爆直後から復旧工事が始まり、1975年頃には江戸時代後期の姿に近付くことができた。私たちがこの庭園を訪れたとき懐かしさを感じるのは、江戸末期の人々と何か響き合うものがあるのかもしれない。壊滅的な被害を被った「縮景園」の復旧に尽くした人々の思いに答えるためにも、「縮景園」の新たな可能性を探る必要がある。

1. 現代の「縮景園」の原点を求めて—大名の庭から大名庭園への変貌—

(1)上田宗箇が造った大名の庭の特色

- ・宗箇の庭の大きさは現在の半分程度で、芝生や小石を多用しており趣もかなり違う
 - ・北岸にある遊壺閣は水際にあるが、築山に囲まれ「蓬莱の島々」の宮殿に相応しい
 - ・今日も残る宗箇の庭の一部、超然居も遊壺閣のあたりとよく似た光景であった
- 宗箇の庭は芝生が多用されていて優しく見えるが、池泉の岸辺は奇石が積み重ねられており、視線は主に池泉に向けられていた。宗箇の庭は藩主浅野氏の遊楽の場、神仙境の境界を味わう場として造られていた。

(2)「縮景園」の見所の創出とその後の大改修—大名庭園への道

- ・大改修以前の「縮景園」では1713年に、稲荷神社と17か所の名勝が設けられる
 - ・「縮景園」の大改修は1783年から始まり、1804年には34ヶ所の名勝が決まる
 - ・大改修後の「縮景園」に多くの島々、幾つもの茶室が生まれ以前と様相が一変する
- 宗箇の庭も1783年からの大改修で、藩主の庭から大名庭園に生まれ変わった。ただ、「縮景園」の大名庭園としての動きは、園内に稲荷神社が設けられた1713年頃に始まっていた。また、この頃になると「縮景園」の美しさを掴み取る動きが始まり、大改修後はその動きが加速することになる。

(3)大名庭園としての「縮景園」の成立

- ・「縮景園」に反時計周りの回遊路が生まれ、園内を散策しながら様々な景観を楽しむ
 - ・1804年に選ばれた「縮景園八勝」では、園外の風景も積極的に取り入れられた
 - ・園外の百姓たちの日常的な営みも、「縮景園」の景観と一体のものとして理解される
- 「縮景園」はもともと他の大名庭園に比べて規模が小さく狭いが、借景という形で園外の広い風景を取り込むことで、観念的には大きな広がりのある庭園に造りかえられた。これは全国各地で大名庭園が流行ったことと呼応する動きといえる。

⇒「縮景園」では大改修以前の1713年の段階で、園内に稲荷神社が勧請され17ヶ所が名勝と定めるなど、すでに宗箇の庭を乗り越える動きが見られていた。1783年から「縮景園」の大改修が始まったのち、借景の観念を利用して園外の世界を大胆に取り込み、観念的であろうと広大な庭園を作ることになった。大名庭園の誕生である。私たちが愛で楽しんでいる「縮景園」は、新たに大名庭園として生まれ変わったこの庭である。

2. 借景を失った現代の「縮景園」の鑑賞の仕方

(1)大名庭園から閉ざされた江戸風庭園へ 写真

- ・「縮景園」は1975年頃までに復旧したが、高層ビルにより遠景が遮られる
 - ・復旧した「縮景園」から借景が失われ、視野が内の庭園部に集中することになった
 - ・現代の「縮景園」は江戸風庭園であるが、大名庭園ののびやかさを失っている
- 「縮景園」は1975年頃以降になると借景を失い、内向きの江戸風庭園へと性格を変えてしまった。「縮景園」から生活臭をも兼ね備えた、大名庭園ののびやかさが失われたのである。しかし、私たちはこの「縮景園」を回遊するとき、所々で非常に美しい光景、心とむ光景に出会うことができる。

(2)現代の「縮景園」の鑑賞の仕方とは

- ・私たちは「縮景園」を訪ねたとき、江戸末期の人々と共感しているかもしれない
 - ・私たちは「縮景園」の各所に残る、江戸末期の人々の美的感性を探る必要がある
 - ・今日の「縮景園」の美を探ることで、江戸末期の人々との響き合いを発見する
- 私たちは江戸末期の人々とどこかでつながると信じ、先人たちが「縮景園」のどこに美を見出したかを探ることで、忘れていた自分の体に染み込んでいる美的感性に出会うかもしれない。これは私たちにとって新しい美の創造ともいえる。

(3)「縮景園」を愛でる逆転の発想

- ・「縮景園」の借景をバーチャルに再現し、在りし日のその美しさを擬似体験する
 - ・「縮景園」の借景を奪った高層ビルから、多角的に四季の庭園の美しさを撮影する
 - ・私たちの感性を駆使して、先人にはない「縮景園」の美を発見する
- 私たちがだからこそ発見できる「縮景園」の美があるはずである。現代のメディア技術をも利用し、また先人とは異なる感性をも駆使し、新たな「縮景園」を探ることは、この庭園の魅力の後代に伝えるためにも強く求められる。

⇒私たちが訪れる「縮景園」は単なる回遊式の江戸風庭園かもしれない。しかし、この「縮景園」に江戸時代末期の人々の美的営為が息づいている。残された文芸作品なども参考にしながら、彼らと語り合い自分の感性を駆使することで、先人たちが必死で残してくれた宝物の価値を高める責務がある。

おわりに

(1)現代の「縮景園」に残された魅力の再発見

- ・「縮景園」の造形意図を知るため、江戸末期の人々の思想や感じ方を深く学ぶ
 - ・江戸末期の人々が「縮景園」をどのように見ていたか、庭園の見方を深く学ぶ
- するには、先人たちとの深く多面的な対話が不可欠になる。

(2)私たちの感性を駆使した「縮景園」の魅力の創造

- ・先人たちとの深い対話を踏まえながら、現代人の立場で新たな魅力を見出す
 - ・新たなメディア技術を駆使することで、失われた「縮景園」の美を再現する
- 新たに「縮景園」の魅力を見出すとき、現代的視点の見方の創造も必要になる。